

ミニシリーズ

乾燥地域の植物あれこれ <その3>

シリーズの第3回目として、アラビア半島の砂丘ではよく見かける野生のスイカ「コロシントウリ」を紹介したい。学名は *Citrullus colocynthis* という。

「コロシントウリ」という名前をはじめて知ったのは、小堀巖先生の著書「沙漠-遺された乾燥の世界」だったと思う。私が国際協力の世界に入るきっかけとなった本だ。沙漠では様々な興味深い植物が乾燥に耐えて生きているものと驚かされたものだ。この植物をはじめて実際に目撃したのは、ルブアルハリ沙漠東部、アラブ首長国連邦の内陸に広がる砂丘を歩いている時だった。ちょうど野球のマウンドのように砂が盛り上がり、そのマウンドをつる性の植物が覆っているのを発見した。よく見るとテニスボール大の果実がいくつも実っており、縞模様が入っているのでどう見ても小さなスイカに見える。すぐに思い出した。「やった！これがコロシントウリだ。」



さらによく見ると、同じようなマウンドが周辺にいくつも観察出来た。つるで覆われた部分に移動してきた砂が少しずつ堆積し、いつの間にか野球のマウンドのようになったものらしい。果実は緑色で縞模様のあるものだけでなく、黄色くなってカラカラに乾燥したものまで様々だ。カラカラになったものは皮と種だけになっているらしく、振るとシャカシャカといい音がして楽器のようだ。セルロイドで出来た赤ちゃんのおもちゃに同じようなものがあったような気がする。



この辺りの沙漠にはキツネ、ウサギ、ネズミ等々かなりの小動物が生息している。また、遊牧の民がラクダ、ヤギ、ヒツジを連れて周辺を歩き回っている。こうした動物達に、よく食い荒らされないものだと思っていたが、そこには植物達の知恵があった。このスイカ、メチャメチャ苦い。このスイカを食べたラクダは顔をしかめると言われている！？ためしにかじってみたが、確かに苦い。

カラカラのスイカでシャカシャカして遊んだ後、皮を開くと種子がたくさん出てくる。この種子を日本に持ち帰って、耐乾性スイカの育種に使おうという試みも行われた。しかしながら、どうしてもこの苦みを克服することが出来なかったと聞いている。

次に、思いがけないところでこのコロシントウリに出会うことになる。場所はシリアの首都ダマスカス、オールドスークの薬屋さん。薬屋さんとはいっても、店先には様々な薬用植物の葉や根や実だけでなく、カラカラに乾いたトカゲやその他訳のわからないものが所狭しと並べられている。お客さんは自分の症状を店主に説明する。店主は客の症状に応じた材料を調合し、用法用量を説明しながらお客に対応する。この薬屋さん、かなり良く効く薬を調合してくれるようで、いつ行っても多くの客で混雑している。私は下痢が治らなくて困っていた時に、カウンターパートが連れて行ってくれた。3種類くらいの植物を調合してくれたが、確かに良く効いた。この薬屋さんの店先に、コロシントウリが並んでいた。見つけた時は、なんだかすごく懐かしかった。確かに、この植物は薬用植物として、ヨーロッパ各地で栽培されてきたらしく、果実に強い瀉下作用があるとされている。また、聖書の植物のひとつとしても紹介されている。



最近になって、カラハリスイカという名前を時々耳にする。この植物もカラハリ沙漠に生育する野生のスイカだ。このスイカに含まれるシトルリンという成分が、化粧品や医薬品に使えそうだということで、多くの企業が着目しているらしい。奈良県では大和野菜復活そして農商工連携活動一環として、カラハリスイカを使った町おこしが実施されているそうだ。これにヒントを得て、コロシントウリを使った乾燥地域での町おこし、地域おこしを考えてみたい。